

	<p>エッセイ</p>	<p>E-18</p>
<p>下北観光旅行記 弓削 耕</p>		<p>発行日 2009/07/13</p>

葛巻町のクリーンエネルギーと六ヶ所村の原子力サイクル施設の見学を終えたメンバー6名は、野辺地で4名と別れ、3日間通用するJR東日本の格安切符を有効に使うべく、曇り空の中、下北半島国定公園を巡る下北観光に出かけました。昨晚の美酒がまだ身体に残りますが、今日は観光タクシーでの旅行なので、安心して眠れますし、カーナビ解読の煩わしさもありません。

「プラザホテルむつ」玄関前を出る頃から、ぼつぼつとお湿りがありましたが、25分ばかり走った後に着いた恐山では、傘が気になるほどではありませんでした。

恐山は1200年ほど前に天台宗の慈覚大師円仁が開いた霊場です。宇曾利湖を中心にして、四方を釜臥山、大尽山、小尽山、北国山、屏風山、剣の山、地蔵山、鶏頭山の八峯が囲んだ聖地を恐山というので、恐山という名の山はありません。恐ろしい山ではなく、心が恐れ多いということを感じずる山だそうです。高野山、比叡山と並ぶ日本三大霊場の一つです。7月20日からの大祭典には早すぎましたが、観光客を中心に2-30人の参拝者と一緒でした。大祭には全国から信者が集まるそうです。総門から山門を通過して地蔵山を背景に建つ地蔵殿へ通ずる参道には常夜燈が立っています。さらにその脇には3屋の硫黄温泉浴場があります。その先には宿坊もあり、善男善女は宿泊もできます。霊場としては珍しい構成です。境内全体が硫黄山の上であり、硫黄臭が立ち込めています。左手の山には地蔵や観音や大師などが置かれ、その間を順路に従って40分ほどかけて参拝するようになっていますが、時間の都合で入口だけで参拝を済ませました。箱根の地獄谷や北海道の硫黄岳と同じように硫黄臭は強烈でした。参詣人が少なかったこともあり、静かな落ち着いた霊場の雰囲気になりました。



恐山全景



恐山に出現した旅人5人 (+α)

ここから我が観光タクシーは鬱蒼と茂る木々に覆われた、曲がりくねった山道を30分ほど走り、対向車に会うことも少ないうちに薬研温泉に着きました。谷あいには何軒かの温泉

宿屋があるという比較的鄙びた温泉郷です。川の中に野天風呂があり、数人の人が温浴を楽しんでいました。駐車場の近くに足湯があり、簡単に利用できるようになっていました。ここは河童の里ということで、河童の像があり、人が近づくと噴水が出てきて驚かされました。目には留まりませんが、多分周囲に池や沼があるのでしょうか。沢山の木々に囲まれ、都会から離れた静かな温泉が楽しめそうです。

温泉で足を清めた一行を乗せた車は山道を抜けると、海岸沿いの「はまなすライン」に出ます。右手に太平洋が続き、海岸に沿って多くの漁船が繋がれています。風が吹き、雨が降ったり止んだりする中を走ること 40 分ほど、風間浦村、下風呂温泉を過ぎると、本州最北端、北緯 41 度にある大間崎に着きます。生憎の空模様で海上は靄模様で、17km 先にある函館も見えませんでした。昨日の好天を少し残しておけば良かったのにと思いました。風も強く、少し寒い気候でした。海鳥が飛び交い、2-30 軒の食堂や土産物店、海産物店が点在しています。最北端に来たことを脚で確かめ、写真に残し、呼び込みに誘われて、昼食を取ることにしました。鮭、いくら、雲丹が載った三色丼を選びました。鮭は今朝取立てのものという売り込みでした。楽しみにしていた大間の鮭であるので、大変美味でした。食後は、付近の店を冷やかしながら、鮭の兜焼き、鮭の塩辛、昆布、雲丹などを買いました。良い品は東京へ行ってしまおうといいますが、やはり現地の品物は安価で新鮮なようです。

正午に大間崎を後にして、来た道を引き返し、国道 279 号線から県道に入り尻屋岬へ向かいます。海上の見晴らしは相変わらず悪いものでした。途中に「原子力船むつ」の原子炉室を解体し展示してある「むつ科学技術館」の横を通りましたが、残念ながら時間がないので外から見るだけにしました。



足湯に喜ぶ老童たち



靄の尻屋崎灯台を背に立つ 6 人（亡霊ではない）

辿りついた東端の尻屋崎は霧の中でした。視界は極めて短く、高さ 37m の灯台はしっかり見えますが、その先は霧の中です。北海道の釧路や襟裳岬と同じように霧の多い土地なのでしょう。観光客もまばらで、寒さもあって直ぐに引き上げてしまいます。岬では、今日のような天候が日常のようで、よほど幸運に恵まれないと良い天気には遭遇しないよう

です。冬の荒天気での凄まじい有様が想像されます。周辺は牧場になっており、^{かんだちま}寒立馬が放牧されています。脚が短く、がっちりとした体躯です。当地は軍馬などの供給地であったのは沢山の馬が飼われていましたが、その後の時代の変化で、馬を飼う家が減り、一時は存亡の危機になりましたが、東通村役場を始め、皆の力で滅亡は何とか食い止められています。景色を諦めて、少し早くなりますが、出発点の大湊に帰ることにしました。ここからの県道は車の少ない比較的平坦な道でした。途中の大きな海産物土産センターに寄り、旅行の土産を調達しました。当地方は鮪で有名ですが、ホタテも名産品で各種の土産品になっています。一方で年間5万tも出る貝殻の処分に困っているそうです。地元の三本木農業高校では活用方法として、廃油からBDFを作る際のアルカリ分として貝殻の焼成カルシウムを使用し効果を上げているという報道がありました。新エネルギーのために大いに活用して欲しいものです。

大湊駅に着いた時には快速列車「きらきらみちのく北上」の出発時間まで1時間の余裕がありました。残念ながら駅近辺は晴れの空でした。大湊から八戸への時間は前日、前々日の復習で、片側の窓に向って展望席のある車両で陸奥湾の風景を眺めながら走りました。夕陽が照らす海を右手に、風力発電の回る風車を左手にしながら真直ぐ続く単線線路をひたすらに走ります。12月に東北新幹線が青森まで繋がるのを見越して下北半島も観光に力を入れていくようで、今日は観光ルート開設の発会式があったそうです。今後の観光での発展も願いました。

八戸から帰途の新幹線は座席の都合で、6人の席がばらばらになったので、本見学会は八戸駅で解散し、楽しかった旅行はここで終わりました。

総合企画立案実施まとめの名幹事の持田氏、六ヶ所村見学計画担当の高砂氏に深く感謝致します。

(本文中の写真は持田・松村両氏に提供していただきました)

(2009.7.13 SCE・Net 弓削 耕)